

『青年・柴田の学級改革』

『なぜ会社は変わらないのか』のルーツを訪ねて

～28 年前の青年・柴田の奮闘～

柴田昌治コレクション

28年前、若き日の私は一高校教師として「学級改革」に奮闘していました。

生徒たちがいきいきと有意義な高校生活をおくるためには学級担任はどうあればいいのか、考えた末に教師である私は「課外グループ活動」に取り組み始めます。今でいう「場づくり」を初めて意図的に試みたのがこのときでした。

教師である私は「よかれ」と信じて、連絡日誌を通して生徒たちと意見を戦わせながら活動をリードし続けます。生徒たちもしだいにグループ活動を通じて自分を見つめ直し、仲間の存在を再認識し、変化していきます。

しかし、自分たちの自然な意思で活動を発展させてほしいという教師の期待とは裏腹に、そう思っただけでやらせればやらせるほど生徒たちの気持は反発し、最後まで自発性を引き出すことはできませんでした。

そのときの苦い経験は、青年であった私に「人が人を変える」ことの難しさを教えました。いくら正論であっても説教では人は変わらない。自らきっかけをつかんだときにしか人は変わらない。そのきっかけをつかめるような仕組みをもつ場が必要だと考え始めるようになったのは、それからです。

教師生活を終えたのちも、それは積み残されたテーマとして私の心の中に深く根をおろすことになりました。

それから28年の年月を経て、『なぜ会社は変わらないのか』という花が咲きました。

シリーズでお送りする『青年・柴田の学級改革』は、『なぜ会社は変わらないのか』のルーツともいえる若かりし日の私の変革奮闘記です。まだ未熟な時代に書かれたこの一文から、今日の私たちの活動が、じつは長い時間をかけた自問自答と試行錯誤のうえに成っていることを知っていただけたらと思います。

そして、さまざまな分野で同じように変革を模索されている方々と一緒に、変革の意味や、人が人らしく生きるための環境づくりについて考えていけたらと願っています。

高校時代をどのようにすごすかということは、その人の人生を大きく左右する重大な問題である。

芸術祭のときの金づちの音とみんなの笑い声。劇の練習の際の討論。球技大会で遅くまで残った練習。このような、本当に生き生きとした活気にあふれた高校生活、そして心から語り合えるような友情を作り上げる高校生活は人生を決定づけてゆく。青春の時代の感動ほど、人の生き方に影響をおよぼすものはないからだ。

ところが現実はどうだろう。朝早く起きて満員電車に乗って学校に行く。そしてただなんとなく授業をうけ、休み時間には友達と楽しそうにしゃべる。そしてまた満員電車に乗って帰ってゆく。どうでもよいような話をただとりとめもなく話す友達。食堂や便所に金魚のうんこみたいにくっついてゆく友情。

このような生活のなかには、心から笑ったり心から泣くようなことはまずない。お互いがバラバラで、深い結びつきのない所に、心から共に手を取り合って泣くような状況が生まれるはずもないからだ。

このようなバラバラの状況を、ある高3の生徒は次のように書いている。

『私のクラスを考えると、いくつかのグループにはっきりと分かれていて、席までもグループに分かれて座っています。だから自分のグループさうまく行っていたら、他のグループがどんなことになっていようと、ほっとけばよいという考え方があるように思います。私自身、自分のグループの人が服装違反をしているとき、すぐに注意をすることができず、他の人が違反しているとほとんど注意しません。もし、親切心で注意しても、反対に「人の事はほっといて」というような態度をとられたり、お節介焼きのように思われてしまいます。特に女子ばかりの学校になると、親切心で言ってあげたことでも、それを素直にとらないで反対の方へ、とってしまう傾向があります。だから私のように6年も女子ばかりの中で生活していると、どういうことをすれば良く思われたり、悪く思われたりするか、つまりどういうところで損をするかがわかってきます。だから自分自身が違反をしていなければ、他の人がどうしていようと、自分が損をするわけでもなく、得をするわけでもないから、無関心で良いと思ってしまいます。』

ここに書かれたような状態はどのクラスにいても多かれ少なかれ見ることが出来る。

この人はグループの中ではお互いに注意し合うことが出来ると書いてあるが、これなどはまだ良いほうなので、グループの中でも遠慮している場合が多い。

こんな風に、クラス全体がバラバラでありながら、その中の一人一人が本当に生き生きできるはずがない。なぜなら学校生活というのは集団でおこなわれるところに意味があるのに、これでは集団でなく、単なる「群れ」にしかすぎないからである。

こんな中で、なんとかもう少し楽しい高校生活をしたい、意味のある高校生活をしたいと願っている人は多い。

そして私も、どうすればみんなが生き生きと楽しい高校生活を送る事が出来るのか、ということをもいつも考えてきた。そしてまだ解決出来ない矛盾や問題点をもちながらも、とにかく、こうやれば、なんとか解決の道がみえてくる、というところまではきたように思う。

そこで、昨年、一昨年と私が担任をし、生徒諸君と一緒に考え、悩み、学んで来たことを通して、解決の糸口をはっきりさせようと思う。学校生活を充実させるためには、一体なにをすればよいのか、と悩んでいる人、又は、クラスの状況を見て、このままではダメだと思っている人、そのような人にこの記録を読んでもらいたい。

ここに書いてあるのは決して成功の記録ではない。それは失敗の連続の記録であると同時に、問題点をはっきりさせてきて、今から出発という記録でもある。

私の担任をした3つのクラスは年を追うごとに、その問題をはっきりさせてきている。そして昨年のクラスも決してすばらしいクラスではなかった。ましてや完成されたクラスなどではさらさらない。そこには多くの矛盾がうずまき、困難な問題が数多く横たわっている。そしてその困難や矛盾は、現実の社会そのものがかかえている困難や矛盾なのだ。そしてそれをのりこえることなくしては、私たちの生活が進歩していかないという問題なのだ。

昨年のクラスの諸君は、その問題を解決する力が仲間の「団結」の力であるということを知りはじめている。困難や矛盾をはっきり見つめ、それを仲間の「団結」で解決してゆくことが出来ると思ったとき、問題は、その解決への道を一歩ふみ出したと言えるのだろう。

今から2年余り前、それまで講師をしていた私は、専任となり3学期から初めてのクラス担任をすることになった。

そのころの私は、教師というのはとにかく生徒の中にしっかり入り込んでおけばいい。そしてその中で、いろいろな影響を生徒に与えてゆけば良いのだし、また与えてゆけると思っていた。それは私自身が受けてきた高校教育、すなわち中学時代とくらべてすべて自由放任なのがいかに革新的で、気楽ですばらしい教育だと思いこんでいたことも影響している。しかし世の中はそんな甘いものではなかった。ある程度生徒と親しくもなれたし話したが、結局私の考えていることはほとんどわかってもらえなかった。またほったらかしで、あまりきびしい文句も言わなかったため、やたらとうるさくさわぎたてるクラスが出来上がっていた。

しかし一学期間の担任というのは、必ずしも、私の反省をうながすのに充分ではなく、一昨年のクラスを担任するにあたって、私は以前と同じような自由放任で、はっきりとした方針を持たないという姿勢で出発した。

そして一年間、私は私なりに一生懸命やってきた。しかし残念なことに、私の「熱意」とは関係無しに、クラス全体は、目的を持たない人間が、ただ集まるときにもたらず、あのなんとなくよどんだ雰囲気の中にはまりこんでいった。

「去年の4月、何も知らないで、ただ高校というところへ、希望を胸にふくらませてはいつてきました。中学と高校はぜんぜんちがうものだとは思ってはいましたが、一年たって感じることは、中学よりも悪いところがふえたことです。去年にくらべてだらけてきたように思います。また勉強しなくなりました。」

一年間の総括でこのような事を書いている人が多い。もちろん、全部が全部、このように後退したわけではない。クラス活動などを熱心にやる中で、だんだん積極的に動いていった人も何人かいるに入る。しかし全体としては、やはり、なんとなくおくってしまった高校の一年間、という印象はまぬがれない。

なぜ、こんなことになったのだろう。私があれほどまでに、平安ムードに流されるな、三無主義になるなとくりかえし強調してきた結果がこのとおりなのだ。三学期ごろから私は真剣にその原因を追求するための努力をしたが、その原因は、次の生徒の文章にも書かれている。

「先生は、こんなになってはだめだ あんなになるなんてことはよく言われたけど、じゃ実際にどうしたらいいかってことはあんまり言ってくれませんでした。どうせ言うのならそこまで言ってほしいでした。」

どうやら私は、どういう方向に生きるべきなのか、ということを示しえないままに1年間を過ごしてきたようだ。

私のつくろうとしてきたクラスというのは、教師の目から見てもとまりのあるクラス、つまり授業の教えやすい、教師に評判の良いクラスであったように思える。確かに一昨年のクラスは、割合に評判は良かった。教えやすいということであった。そしてたしかにそのとおりなのだが、他方では無気力が、無関心が、無責任が充満していきつつあったのだ。

私はこのような反省をする中で、教師としての自分の姿勢への批判をも含めて、次のようなまとめを書いた。

総括

あまりにも短い一年だった。君たち皆と親しく話し合える日も、もうわずか数日、ついこの間君たちと知り合ったばかりなのに、と思うと本当にさびしい。もっと一人一人と充分に話し合うことが出来たらよかったのにとしみじみ思う。最近になってやっと君たち一人一人のイメージが私の中にある程度はつきりしてきつつあったのに。

しかし今さら何を言ってもはじまらない。ふりかえってただ悔やむより、それを前進のための糧とすべく、もう一度整理してみたい。

まずこの間も言ったことだが、この一年、私にとって最も大きかったことは、君たちによって私自身、大きく成長させられたことである。君たちは他の人では決してくれないような、厳しい批判をしてくれた。批判をされた時点ではもちろん腹もたったし、こんちくしょう、とも思った。だが今となって考えれば、その批判がどれほど私にとってプラスになったか、はかり知れないものがある。

例えば「先生はええかっこうする。」「先生は私らをバカにしている。」といった批判を時々耳にした。昨年度まで、私はそんな批判は全くあたらないと思ってきた。しかしこの一年、君たちと一緒に生活をするなかで、ようやくその批判の正しさが分かってきた。もちろん今でも私は君たちをバカにしているとは思わない。しかし私が「ええかっこう?」をすることが、客観的に見れば君たちをバカにすることにつながるのだ、ということが分かってきたのだ。

君たちの批判は正直できびしい。私は君たちの批判を謙虚に聞きたい。これからは担任ではなくなるが、私に批判があればぜひ言ってほしい。

次に私たちのクラスについて簡単に振りかえってみたい。君たち一人一人を見ていると、多くの人がこの一年間に前進をしている。クラス全体としてみれば、落ち着いた、まとまりのある良い面と、ほとんどの人が生きがいを持っていない無気力な悪い面とが同居している。

一年前、君たちが入学してきたとき、君たちはまことにおとなしかった。あまり静かだったので、私はもつとにぎやかにさせようと考えた。そして、ただザックバランに君たちと交わる中で、人間的に信頼関係が出来れば、それでクラスがうまくゆく、と単純に考えていた。

- ・柴田先生欠席！（バンザーイ）
- ・生物の時間運動場で遊んだ（トッテモタノシカッタ）
- ・はじめは静かだったこのクラスも今ではたいへんにぎやかになってきた。（ニギヤカスギルカナ？）
- ・今日は大変すばらしい一日だった（ウワサニヨルト センセイガケツセキダツタカラトカ……？）

今日は暑いぐらいで、5時間目は全員いねむり（下田さんたちがサロメチールをつけすぎて保健室へ。）クラスのみんなが教室を明るくしようとハリキッている。ストで、おくれた人があった。きのう放課後、着がえている人があったのに先生は、はいって来られた。

このようなやりとりの中で5月に入り、今まで静かだったクラスがなれるにしたがって、急にうるさくなっていった。自分でにぎやかになるようにしむけておきながら、私にはこのうるさが少々気にくわなかった。すなわち、教師が静かにせよと言っても静かにならないにぎやかさに腹をたてていたのだ。

体育の時間きびしかったのでヘトヘト……で6時限目のホームルームにおくれた。Because これは体が自由に動かなかったからです。それなのにガミガミいわれるとセキが出てまた胸が痛くなりました。私たちがだらけていたと思われるのならあやまります。ごめんなさい（みんなの声）

この頃、君たちに「自分について」という作文を書いてもらった。そして、私も書いた。この時、君たちの書いたものを公表するか否か、私の書いたものを君たちに見せるか否かで、君たちと色々もめた。これは私の作文指導に対する目的がはっきりしていなかったために出てきた混乱で、全く私の責任である。結果として、いらぬ不信感を君たちに与えてしまったのみである。この時も、私にはその批判をしっかりうけとめる余裕がなかったようである。それ以後6月末まで続く球技大会の中で、クラスのまとまりは表面的には進んでいった。それが他のクラスとの試合をしたり、他のクラス又は個人から、8組に対する攻撃がある中で出てきた同胞意識のようなもののように思える。このようにして一学期は終わる。クラスのまとまりは一見あるようだったが、そこの方までしっかりしていなかった。すなわち表面的になれ合っている面が多く、お互いにまだ本当の心は分からなかった。恥をさらすのはつらいことだ。しかし、?ええかっこう?を一人一人がしている間は、本当の仲間は作れない。私も含めて、8組はこのような問題をかかえたままで夏休みに入ってしまった。

柴田昌治コレクション

一学期の矛盾が表面化するのには芸術祭の準備の中である。はっきりとした方針をもたず、ただ君たちと人間的に親しければ指導は出来ると考えていた私の行動は、君たちから見たら矛盾にみちたものだっただろう。劇の練習には来ない、たまに来てでも発声練習もしない。いつもみんなにクラスのまとまりを言うくせに、自分のほうこそまとまりが悪いではないか、というわけである。

先生は責任ももって行動しなさいなんていってるくせに自分は劇の練習してないでしょう？練習に出て下さい。

こんななかで、君たちと集団で、また個人で色々話をした。この苦しみの中で、私は教育、というものに対する自分の姿勢を大きく変更することを余儀なくされていった。すなわち今までは研究の方を自分の生活の中心と考え、その次に教育と考えていた。そしてそれでも私は別に、特に人より劣った教育をしてはいないと思いついていた。この考えが、君たちのきびしい批判と教育者としての喜びを、同時に感じつつあった中で変化していったのは当然の成り行きであった。そして、君たちにいやがられながらも授業参観をしたり、以前に増してクラス運営に積極的に口を出すようになったのは、このためである。

大きな問題を残しつつも全体の方向として、クラスの団結を目指して芸術祭・文化祭などが進行していった。その中で私の最も感心したことがあった。つまり、授業中に本を読んでいる者が多いことが私の耳に入り、当然私は君たちに一切本を持ってくることを禁止しようとしたことがその発端である。結果として君たちは自分で規律を決め実行し、違反があれば相互に批判しあいながら規律を守った。これは君たちが自分で思っているよりはるかに大切なことなのだ。生活に必用な規律を、自分たちの手でつくり、自分たちの手で直していく。このことほど大切なものはない。ただこの中でただ一つ残念なことは、「なぜ本を読むのか、なぜ本を読まねばならぬ位、授業が面白くないのか、それをみんなの力で改善する方法はないのか」ということまで話し合いが深まらなかったことである。

全体的にもう一つ真剣味が欠け、授業中もうるさくなってきた日が続く中で、私は強引に席替えを強行した。私の日頃からのクラス運営についての口出しぶりが気に入らなかった君たちの不満は、この席替えに協力した運営委員に集中した。私に対する批判も、強引な押し付けに見えるいろいろな方針、クラス新聞、スポーツ大会などで。その不満は頂点に達した。

このようななかで行われたのが、11月27日の2-7との対抗試合である。

今日、2-7との試合があった。

バレーボールは引き分け。

バスケットは1チームは勝ったよ。(1チームは負けた。)

試合の申込みは2-7の人がしたんでしょ？

かげの声 ちがうね、先生どおしで決めたんだった。(きっと〇〇先生から申し込んだんでしょ！！)

そうと分かっていたら、試合頑張らなきゃよかった。エネルギー損したわ。

このところクラス全体が無気力になりつつあり、又規律も無くなりつつある。先生の態度もおかしい。席替えしたらよいと思う。(コマッター)

以上ふりかえってみて、私としては学年初めより、はっきりとした考えを持たずに君たちを担任しようとしたこと。さらに「生きがい」を君たちが持つことを援助できなかったこと。等深く反省している。なぜ学校に来なければならないのかを、将来の君たちの進路を一緒に考える中ではっきりさせていきたかった。

また、私たちは君たちに色々なことを要求した。そして自分の気持ちを君たちが分かってくれないと腹を立てたり、あせったりした。私はいつもクラスのまとまりを口にした。しかしまとまったクラスが楽しいことぐらい誰でも分かっている。だがまとめよう、まとめようとむやみに努力することほど、しんどいことはない。

私は君たちに、本当にこうすればクラス全体が生き生きとしてまとまってゆく、無気力をなおしてゆく。という方向を示し得なかった。

来年度は今年の経験をもとにして、私自身、さらに前進したいと思っている。

君たちの支援をお願いしたい。

クラスがバラバラになるが、いつまでもみんなが旧1-8組のことを覚えていて話し合う機会があることを期待したい。

2年になっても、3年になっても、ひたむきに人生を歩んで下さい。

3月13日

1969年平安女学院高 1年8組

そして昨年の私のクラスは、1昨年のこの手痛い経験を踏まえて作り上げられてきたということができる。それでは、昨年のクラスについて出来るだけ詳しく説明してみたい。

1. 最初の数日間

前年の失敗を土台にして、なんとかもっと良いクラスを作ろうといういきごみと期待の中で、私は綿密な計画を作っていた。

『このクラスになって、初めてびっくりしたり、まごつくことばかりでした。先生の言葉、「自分だけが良い子になるな」から始まって、規則についてのプリント、それに班作りなど、予想もしていなかったことばかりでした。』

ここに書いてある、自分だけが良い子になるな、とか、規則についてのプリント、班作りなどは、全て綿密な計画のもとに練り上げられたものであった。その概略を説明してみよう。

まず最も大切にすることは、クラスのみんながそれぞれをお互いに仲間として意識し合うようになること、いやそのような状況に一步でも近づくこと、これが最終目標であり、最も大切な点だ。ここで単にクラスのまとまり、が最終目標でないことに注意してほしい。

そして、この最終目標に達するために、欠かすことの出来ない考え方をはっきり示すこと。これはクラスの原則として、4つにまとめて後でプリントにして配った(資料1)。そしてこの考え方は、入学そうそう第一日目から喋ったのをはじめ、事ある毎に何度も繰り返した。そしてその中の一つが、自分だけ良い子になるなということである。

つまり、クラスで何か行動(例えば授業ボイコット)をする場合、もし自分がそのボイコットに反対の場合、それは徹底して反対すべきだ。ただ、もし自分が反対したにもかかわらずボイコットをすることが決まったら一緒にやれ。もちろん行動を共にせよと言っているので、意見まで変えよとはいっていない。意見は最後まで反対なら反対で良い。自分だけはそんなことはしませんよ、と高見の見物をしたり、ボイコットを分裂させたりするのはやめろ、というわけだ。というのは、もしそのボイコットが間違っていた場合でも、その人が反対しつつも行動をみんなと同じくしていたなら、皆と同じ気持ちでもう一度正しい方向に戻って出発することが出来る。

世の中には、ときどき先生に良く見ってもらうために良い子ぶるのがいる。これは最も恥ずべき事だ。そして、自分の意見と違うから、といってみんなと同じ行動をとらぬのは、この良い子ぶっているのと良く似ているというわけである。つまり、いつも仲間と同じ立場に立て、というのがこの考え方なのだ。

また規則については、くわしく資料を見てもらうとして、これについての生徒の感想を見てもらおう。

『規則についてのプリントをもらったとき、正直言って理解できませんでした。中学校の頃は、規則は守らなければいけないものだと思っていました。(それがどんなに合理的でないものでも)この時、私は物事を深く考えることをしてなかったように思う。』

ここに書いてあるように、多くの生徒がなんとなく良く分からぬと思いながらこのプリントを見ていたのだろう。

つまり私は入学後の数日間で、今までとは違ったものの考え方、むつかしく言えば「価値観」がここにはあるんだ、ということをはっきりと印象づけようとしたわけである。そしてその試みは、ある程度成功した。

2. 班作り

お互いが仲間に、という最終目標に近づくには、このような物の考え方がまず必要なのだが、それだけではなかなかうまく行かない。というのは、クラスというのが放っておくと、ただなんとなくプラリと集まった人間の群れになってしまう場合が多いからだ。だから、お互いを積極的に結び付けてゆき、話し合わせ、ぶつかり合わせる手段として、班というものを考えた(もちろんこの手段は、必ずしも班だけではなくもっと色々な方法が、各クラスの状況に応じてあると思うが)。

班といえば、誰でも小学校のときを思い出す。そして何も今更高校生にもなって、そんな幼稚なことを、と思うのが人情というものであろう。

『私は一学期班を作ったとき、「嫌だなあ」と思いました。中学時代にもクラスで班を作っている放課後やっていました。だから班を作ったら、また放課後遅くまで残っているやらんならんなので嫌だなあ、と思ったのです。』

このように考えている生徒も多くいたに違いない。そしてまた一方、このような人もいた。

『入学した始めから、なんとなく、よく言えば自由というか、だらけたような印象がありせつかくの高校という、新しい世界に一種の夢や期待をかけていた私は、絶望したというか、あきらめに似た気持ちにさせられてしまいました。(中略)始めからそんな印象を持っていた私にとって、最初先生が言われた言葉や班作りを提案されたことは、私の絶望感を少しでも和らげてくれました。』

こういう皆の期待やとまどいの中で、班作りは出発していった。

ここで私が班をなぜ作ったのか、という理由を生徒に配ったプリント(資料2)を参考にしつつもう少し詳しく説明しよう。

それは、まずクラスの中にしなくてはならない用事を多く持ちこむことなのだ。例えば新聞を作るとか、クラスで合宿をするetc.。そしてこの多くの仕事をするのには、全員で分担してやる必要がどうしても出てくる。ここで、クラスの中で取り残された人物をなくそうというわけだ。そして多くの行動を通じて、人間どおしの接触の場、ぶつかり合いの場を作ってゆく。この中で友人ができ、話し合いの基礎、仲間を作る基礎が出てくる。以上が大体、私の考えの全体である。

3. 班作りの準備

私は、まずどのような形の班を作るかを考えた。そして実際に仕事をする集団としての班分けということに結論が達した。それぞれの集団＝班が、何か目的を持って行動する中で、お互いに話し合いをせざるをえなくなるし、またすると考えたわけだ。そして、それじゃ日直の仕事も班単位にさせようと思った。

班を作るということは、4月の10日に言った。そして、それぞれの班の簡単な仕事内容を明らかにしたプリントを配って、自分で選んでおくように、と言った。この説明文はこちらのイメージが貧弱であったため、あまり参考にならなかった様子であった。

実際の班作りの作業は、4月20日から23日にかけて約3時間余を使って決められた。

最初の日、班と委員をどのようにして決めるかを決定し、私はそれを次のホームルームのときまでにプリントですった(資料3)。

23日のホームルームでは、そのプリントをもとにして、私が議長をしつつクラス役員と班を決定した。私が議長をしたのは、議長が不慣れで議事の進行が難しく、また特に大事な議題でもある、という意味で、生徒に無理に司会をさせるのは良くないと思ったからである。

クラス役員の決め方は、20日にまず無記名でこんな役員なら立候補しても良いというのを前もって書いてもらっておいた。そしてそれと同時に、積極的に立候補する意味というのを強調した。23日に今度は記名で立候補させると、会計一名のみで後はみんなやめてしまっていた。無記名なら相当数あったのだから、記名で立候補しないというのは非常に無責任な態度だときびしく言った。そしてその中で、委員長、副委員長など16名の立候補者が出て、その中で選挙が行われた。

4. 班活動の実際

このように形の出来た班は、それぞれ週一回の班会を中心に動き始めた。最も活発な動き方をしていたのが新聞班であった。これは、目標が新聞を作るという具体的なものであったために動きやすかったことが最大の原因であると思う。

「私は人前で発表したり、意見を言ったりするのがとても嫌いです。中学のときでも人の意見に対して、よっぽど反発しない限り自分から意見を言いませんでした。高校になって初めて班活動をしました。多数の中ではなかなか自分の意見を言えない私でも、少数の班の中では自分の意見をどしどし言うようになりました。中学のときの友達などに会って、「Y子変わったな、何でもずばずば言うようになった。」といわれます。これも私の一つの進歩だと思います。私は一年間新聞班で活動してきました。一学期は一週間の内で4日くらいは、放課後残って仕事してきました。よく意見の食い違いで言い争いもしました。どうすればもっと新聞を良くしていき、毎日のように残らないで作れるだろう?私たちが、いくら一生懸命作っても、ごみ箱を見れば新聞が丸めて捨ててある。そんな事はたびたびありました。何回か新聞を発行しても、皆の反応があまりない。どうすれば皆から反応が返ってくるだろうと話し合いを何回かしました。話し合いをして、始めは班長も班の皆も冷静に話し合っていたけれど、だんだん喧嘩のようになったこともしばしばでした。私は私なりに考えました。この考えるということが私が班活動をしてプラスになった一つです。

考えること、私は班の数人と毎日、同じ事ばかりを話し合いました。物の見方も変わったように思います。中学のときのように、表面だけを見て表面だけで考えてはいけないと思うようになりました。

もう一つ私が班活動の中からプラスにしたものは友達です。クラスは放っておくと気の合うもの同士がいくつかのグループに分かれます。気の合った友達も大切ですが、自分が持っていないものを持っている人、こんな人と友達になるのは大変プラスになります。あまり話し合いのない人と一つの班で行動して行くことは、みんなと友達になる良いチャンスだと思います。」

新聞班の連中はよくもめた。新聞が一つ出来上がるたびに何か問題が出てきて、泣いたり喧嘩したり、それはもう大変なものだった。この中でも、最も良く対立し、新聞班を二分していた二人が最後に、「何か見えない糸でしっかり結ばれています。どんな事でも相談できるでしょう」と総括に書いている。

もちろん全ての班がこのように活発に動いていったわけではもちろんなかった。

「私は中学から班活動というようなことをやった覚えがなかったので、このクラスの人達について行けるか不安だった。」また仕事をするのが面倒くさいから、なるべく仕事をやらなくてすむような班に入ろう。それに「私一人くらいサボったりしても、別に関係ないやろなあー」などという利己主義的な考えを持って学習班に入った。たまたま班長になり、運営委員会などに出ているうちに、この班がやらなくてはならない仕事がどれだけクラスにとって大切か、ということが分かり、すごく責任が重く感じられた。

また、私の班はおとなしい人ばかりが集まっているんだから何も出来ないんだ、と努力をしないではじめから決め付けていた。

あやふやな気持ちで入ったため、本当にクラスやクラスの皆のためにやったという確信の持てる仕事は一つも出来なく、中途半端に終わったような気がする。」

このように、活発に動いた班もあれば、不活発な班もあった。しかし全体としてみれば、みんな放課後、よく残って色々な仕事をしていた。

「私たちは、どうしてこんなに学校面白くないんやろか、と思い悩んで話し合った。時には、先生や教生の先生をも入ってもらって、本題から外れた「結婚」についてなんかもがやがやとやっていた。その時、平女中→平女高と進んでこられた牧先生が、「こんなに話せるなんてうらやましい」といったことが、今でも忘れられない。」

このように、本来の班活動以外の問題でもよく話し合いが行われたことも大切な点だと思う。

5. 授業改善のための自主的な動き

このように、クラスの中でやっと班活動がなんとなく軌道に乗り始めた5月8日、ある一つの事件が持ち上がった。私のホームルーム記録より拾ってみよう。

5月8日 昨日あたりより、数学の時間の問題がクラス全体の中で大きな問題になってきている。6日のホームルームのときだったか、議長のY子、M子あたりより、数学の問題での話し合い連絡があった。事前に充分学習班での討議がなされておらず、一般的な皆の不満がそのまま出てきた感じだった。その時は、H子、N子などのテストボイコット方針が良く論議されぬままに通りようとした。私が討論を聴いている限りでは、「まだよく話し合われていない」「よく考えられていない」という意見があった。また全体の意見がまだ固まっていなかったようであり、討議も長引き、実り少なくなってきたので、次のような提案をした。すなわち、学習班に差し戻して方針を作ってもらってもう一度話をし、という提案であった。しかしそれも、20名くらいの賛成で、よく討議されぬままになんとか否決された。そして結局ボイコットの方針が23票の賛成で通った。その後、わずかの差なのにボイコットするのは……というような文句も出てきたりして、議長は私のところへ相談に来た。前にボイコットの方針が出たときに私は、君たちが正しいと思うならやれ、但しみんなでやれと言っておいた。しかしこのように生徒の側からもう一度相談に来たので、私はそれならもう一度考え直してみるように進めた。

その方針は、7日の自習時間に一応破棄され、(3分の2以上の賛成で)もう一度考え直されることになった。そして4つほど出てきた提案の中で、先生ととにかくもう一度話し合うことが決められた。そして、7日のショートホームルームの時、みんなで決めたこと出し、みんなで言おうと一応決め、8日に話し合いが持たれた。

特に中心部分が興奮して話を進めたためか、もうひとつみんなの発言が少なく、結局8~10名の者が言っただけ。中には後の方で内職をしているものがあるという噂まで出ていた。

ところがこの話し合いでも満足できずに、先生の態度に不満があるとして、9日の朝、1時限目の時間を少しもらって話し合いをした後、2時限目の数学のときまたもや先生とぶつかった。朝礼のとき、私は先生に意見や批判を言うのはほとんど言えばよいが、君たちの内部でよく話し合ってからにしてはどうか、という意見を言っておいたのだが、その私の意見も無視された状態だった。彼女たちにはよく話し合うという経験もなく、どこまで話し合えばよく話し合ったことになるのかよく分からなかったらしい。

そしてまたその話し合いで、H子たちは相当感情的になり発言したらしいが、K子らが途中で、先生があんまりかわいそうだ、と泣き出したことで混乱はさらにひどくなった。K子らにつられて先生を攻撃していたM子らも一緒に泣き出したらしく、なんだかうやむやの内に終わってしまったらしい。

まだ彼女たちの不満は残ったままだが、一応これで、これ以上先生を追求することは止めたようである。

一年間を通じて、この様な授業の問題、また自分たちの授業を受ける態度の問題、また服装の問題等々が何度もホームルームで話し合われるのだが、この出来事は最初のものであった。この件に関して評価すべきなのは、まともな授業を受けることを無自覚的ではあるが明確な権利として感じていること。またその権利を守るために行動したこと。そして、これが一学期のまだ早い時期に起こったこと。そしてまた、先生の授業について文句を言うからには自分たちも勉強しなくては、とその頃から共同学習を始めたこと。等彼女たちに色々な経験を与えた点である。また問題点としては、出発点にテストが嫌だという気持ちが、心の奥の方にあったのではないかと、ということ、また、中心となる人達が興奮してしまって冷静に事態の動きを見ることが出来なかった点、また全員が発言するということが出来ていない点等数多くある。特に先生に対する個人的反発が数学の授業のことを真剣に考えるということよりも前面に出てきて、それがかえってクラスの統一を妨げたようである。とにかくこの事で、彼女たちは行動することを、知ったり感じたりしていた。特に中学でこういう経験のまるでなかった生徒には相当の驚きであったらしい。

6. T子問題とクラス運営委員会

クラスの中のT子が、ある問題を引き起こした。私はこの問題を、クラスの生徒諸君の手を借りて解決しようとした。すなわちT子を生徒の中に入れて、生徒同士の励ましと批判によって、T子の姿勢を変えていこうというものであった。そして、私はその準備段階として、クラスの運営委員会にT子の問題の相談を持ち掛けた。この運営委員会というのは、各班の班長、及び委員長、副委員長で構成されていた。私の方針としては、当然次の段階でクラスの皆におろして、みんなでT子の問題を考えてもらうつもりであった。そしてこの段階では、一応クラスのほかのメンバーには黙っているようにといっておいた。

運営委員の人達は、私に口どめされているため、まず自分たちだけで何度もその問題について話し合っていた。そして、自分たちだけでT子のところに手紙を書いたり遊びに行く約束をしたりして、T子を励ましてくれた。

ところが非常にまずいことに、この問題は3クラスにまたがる3名に同時に関わる問題であったので、各クラスの歩調をそろえなくては、ということが問題になってきた。そして結局、私のクラスで、今行動されはじめかけた手紙や訪問は禁止ということになった。そしてこの禁止は、クラスの皆に十分な事情の説明をすることを不可能にしてしまったので、なんだかよく事情の分からないクラスの皆は、事情の分かっているらしい運営委員会を白眼で見始めた。

つまり運営委員会のメンバーは、私に口止めされていたため皆に秘密に話し合ったり、行動したりしたことが、何か皆に不信感を抱かせた。

しかしこの問題は単にそれだけにとどまらず、班と運営委員会との関係、班長との役割の重要性と言うものを、もう一度私にも、また、他のクラスのメンバーにも感じさせた。つまり、運営委員会で話し合ったことが、うまく班員の皆に伝わってこなかったこと、また班員の意思を十分に運営委員会に反映させることが出来なかったことなどがそうである。

『私は小・中学校時代から班作りに慣れていたせいか、高校に入ってから班作りにはさほど抵抗は感じなかった。しかし私の心に反抗心が起こったのは、一学期の後半からである。それは、私たちのクラスに大きな問題(T子の問題)が起こったとき、各班の班長さんで編成されている運営委員会だけでこの問題を考えていたからである。こんなに班長と班の皆の交流がないのなら、班なんて作らなくて良いと思えたのだ。』

この問題は、クラスにおける運営委員会の役割と言う大きな問題を投げかけると共に、班活動全体に対する不信感をも生み出した。しかし全体として、T子の問題を積極的に考えたものにとって、それは非常によい経験だったようだ。

『仲間って良いな、と思ったのは、T子のときと球技大会のときだった。T子の問題で友達同士ぶつかり合ったことがあった。でもその時の争いは、後から何にも腹ただしく思ったりせずに、スカッとしていた。』

いくら意見が対立しても、仲間の皆が同じ目標に向かって行っているからだ。T子をどうにかして退学させずにこのままこの学校に残れるように、と思う皆の気持ちが同じだからこそ、その仲間同志ぶつかり合っても崩れずにいたのだと思う。また、ぶつかり合った後の方が、前よりも一層友達同士信頼できたように思う。』

T子の問題で私がもっとも痛感したのは、教師の団結である。これは単に足並みを揃えるということではない。学年の生徒全体、学校の生徒全体のことを考えれば、当然他の教師とお互いに理解し合わなくては何も出来ないことは明白なのだ。私はクラスづくりということにあまりに目が行きすぎて、教師同士でお互いに助け合ってクラスを作る努力が不足していたことを反省している。

8. Nさんの死

ちょうど私が退院してきた日に、Nさんが交通事故にあった。そして約一週間後に彼女は永遠の眠りについた。

クラスの生徒は彼女の死を多分に感傷的に受け取っていた。私は、Nさんの死をムダにしないことは、君たちがこれを機会に人生について、生きることについて、もっと真剣に考えることだ、と何度も機会ある毎にいった。しかし、まだクラス全体が深いところでは結びついてはいず、その構成メンバーの一人一人の存在が、皆の心になくってはならぬものと感じられていない状況では、涙は感傷的にならざるをえない面があった。しかし、中にはその死を自分と関連させて深く捉えようとしている者も居たことは事実である。

『今は良き思い出となっているけれど、あの時はただおどおどするばかりで、何をするにもNさんのことが気になって、何にも手につかなかった。あんな身近に「死」と言うものを感じたことはなかったし、また、あれほど交通事故の恐ろしさをひしひしと感じたこともなかった。Nさんとは学校の行き帰りも一緒だったし、家族の者と居る以上に一緒に居る時間も長かった。そして、私はそんな彼女の死をただ悲しいと言う、そんな一時的な感情で終わらせたくなかった。そして私たちが彼女の死を真剣に受け止め、生きることの重大さ、生きる情熱、ファイトをそこから見出し、精一杯生きることが、私たちにとってもNさんのためにも一番大切なんだという結論に達した。確かにその頃からじゃなかっただろうか、私がこの学校において目的を見出そうと思い始めたのは……。だから彼女の死が私を成長させたと言っても過信ではないような気がする。』

9. 一学期の全体

Nさんの死で悲しみに沈んだクラスも、しばらくするとまた前と同じように活発ではあるが深みのない状況に戻っていった。

『やがて班作りにより、多くの仕事を皆でやる、そしてそこから生まれる友情の中で、少しずつ学校、クラスの人達に慣れてきました。

ある時は「橋のない川」を見て感動したり、ある時は男の子の話に心を弾ませたり、勉強とは何のためにするのか、と悩んでみたり、違反をしたり、一学期中で自分は随分変わってしまったように思う。』クラス全体のことより、自分のことだけを考えて行動してきたように思う。ずいぶん勝手な人間だったと思う。

来る日も来る日も目先の物を追い掛けているにすぎない毎日だった。大きな声で笑い、それだけが女性の特権であるかのように思っていた。だから人との対話も外見的なもので、何の意味も深さもないものだった。

クラスの問題にしろ、自分の問題だと感じることなく過ごしていた。一方クラス全体としても、私の考え方がこのクラスの一般的な考え方であり、もちろん批判されることも批判することもなかったように思う。

違反についてもそれほど深刻に考えないで、ただセンスが悪いから違反したり、というように、根本的問題に触れもしなかった。それに規則とは交通信号のようなもの、ということも当然知る余地もなかった。

今から考えれば、ずいぶん勝手な振る舞いをして来たと思わずにはいられない。

このように私の一学期は、一本線のない、随分小さな物だったと思う。そして、クラス全体も団結とは程遠いものを感じていた。みんなお互いに理解しあっているようで、一人一人バラバラで背を向いていたように思う。」

以上のような状況の中で一学期最後の行事である合宿を迎えるが、予定していた女の生き方に関する話し合いもうまく行かず、あまり成果のない合宿となってしまった。

10. 二学期

二学期は当初から、班作りは生徒の手でと考えて出発した。そして、実際に班が出来て活動し始めたのは、11月に入ってからだった。これは一つにはその間に芸術祭などがあり論議が中断されたり、時間がとれなかったりしたことがある。もう一つ大きな原因は、一学期の運営委員会とクラスとの断絶が尾を引いていたことである。

『こんなに班長と班の皆の心の交流がないのなら、班なんて無くしていい、と思えたのだ二学期にまた班を作るかどうかというときに、私はこの案に反対だった。』

また次に、全体の気分として、誰かがやってくれるのではないか、という消極的な姿勢が、委員長も含めてみんなのなかにあった事である。

『2学期は班が編成されるのが遅くって私の班もなんとなくしまりなく終わってしまいました。2学期には行事も多く、クラスがより密接化し、活動が盛り上がりだしてはならなかったと思いますが、芸術祭はまあまあとしても、文化祭は何も残念なことをしたと思います。もし班作りが9月に入ってすぐに行われていたら、もっとクラスの活動は盛り上がっていたと思うとすごく残念です。早く班を作らなければ、と思いながら、先生やクラスの誰かが積極的に早く言い出さないかとそればかり待っていて、ある時なんか委員長に「まだせえへんの」とか無責任なことをいったりしたこともありました。もしクラスで文化祭のとき何かするとしたら、高校生の生き方とか、クラスのあり方について話し合いまとめて展示するとか、今ならいろいろ思い浮かぶし、もしそれが実現していたら、一年の終わりにはもっと素晴らしいクラスになっていたと思います。』

生徒の班作りの出だしが遅かったのは、私の方にも責任があった。自主性に任すとは言っても、それは何もほっぽりだすのではなく、適当な援助は十分する必要があったのだ。にも関わらず、私は時々委員長に、班作りのことはどうなっているのか、と注意を促した程度のことしかしなかった。この事は非常に残念に思っている。

11. 芸術祭

班作りとは別に芸術祭では、みんな比較的まとまって良くやってくれた。

劇の練習も最初は集まりが悪かったが、段々と調子に乗って皆の協力のうちに劇は成功した。この事は、クラス全体で一つの仕事を仕上げたという意味で大切なことであった。

12. 二学期後半から三学期

そしてこの頃から、クラスの中で積極的に自分の生き方に疑問を持ち、これで本当に良いのだろうかと考え始めた部分が多くなっていった。そしてこの様な姿勢が、本当にクラス全体のものとなるのは三学期にはいつからであった。

『私にとって三学期というのは、今までより少しでも変化が起こったような気がする。はじめはお正月気分が抜けきれないというかしらないけど、二学期同様だらだらした毎日だった。何とかしなくては、と思いながらもこれといった策があるでもなかった。』

このようにして三学期は始まるのだが、この頃起こった高一の服装検査も一斉取締まりの問題に対する不満は、皆の間にくすぶっていた。こんな時、二月二十二日のホームルームでそれらの問題について話し合いが行われ、また引き続いて二十六日にも約五時間かけて討論が行われた。そして、二十六日の二限目に私の聞かせた部落問題に関する一女性のテープも皆に大きな影響を与えたようであった。

『そんなある日、クラスに今までに無かった事が起こりました。それは「団結」ということについて、皆と一緒に真剣に討論したことです。その時ほど驚いたことはありませんでした。あれほど真面目に、そして有意義に、みんなとあんなに素晴らしい討論会が持てるとは思いませんでした。私も興奮するくらいでした。何故もっと早く、この様な討論会が持てなかったのかと悔しく思います。そしたらもっと早くクラスの一人一人のことが良く理解できたと、今よりもっと深く友達の考えを知ることが出来たのになあ。でもいくら遅くても私は嬉しかったし良かった。その事によって私の考え方もはっきりしてきた。クラスの皆が一つになって話し合えた。』

『このクラスは話し合いの場を多くつくった。しかしそれはいつも中途半端の終わり方だった。時間が来たからといって、議長が口でまとめてそれで終わる、だからいつも意義のあるものというか、心に残るものがなかった。だからすぐ忘れてしまう。けれど何日か忘れたが、木曜日の六時間からの話し合いは、これからは忘れることはないだろう。それほど有意義であったし私にも変化があった。議事の進行の仕方の批判は別にして、その内容が大事である。皆がどんどん意見を出す、素晴らしいと思った。羨ましいとも思った。どう書き表してよいかわからないが、感情的になったにしろ、皆が本当に考えていた。一つになっていたといっても言い過ぎにはならないだろう。』

話し合いの雰囲気はこのようなものだったが、その内容は次のようであった。

『「団結」するにはどうすればよいのだろう、もやもやしているうちにあの部落研のテープを聞いたその頃私は図書して「部落」という題の写真集の中の小さな子供の顔や、おばあさんの顔を見て、差別に対して「ひどい」と思っていた。そしてこの大きな部落解放にも団結が必要だとつくづく感じていたところと重なり、テープを聞くのを大変期待していた。そしてそのテープは期待を裏切らず、部落解放にもっと目を向けなくてはいけないということだけではなく、私の疑問だった団結への一つの手段、そして生き方などいろいろ考えさせられた。部落問題は後にして、団結の手段についてだけれども、このテープを聞いて、IやYとその事について考えた。このテープの中の「仲間」という言葉がとても印象的だった。』

私は、授業中必要以上にうるさい人を少しでも減らし、かつ団結するには、お互いにその場で注意し合い、助け合っていかなければならない。そのためには、「私はうるさい人に注意できる資格がない」なんていったら、このクラスで一体どれだけの人が人に注意できる資格を持っているだろう。そこをAさんに聞くと、「やっぱり静かな人が注意し、そしたら静かにしなくては、と思うのと違うか」と言ったけれど、一体その方法で今までやってきてどれだけの成果があがったのだろう。だから今こそ方法を変える必要があるのだ。人に任せきりで雰囲気が良くなるはずがない。自分で人に注意すると同時に、私は、自分もムダ話を止めようと思えるようになれば、自分自身で自分を変えようということになるし、少しはムダ話が減るのではないか』

ここで大切なのは、一つのことにかまうことはない、ほっとけ、というような考え方ではなく、お互いが助け合う中でこそ成長し、進歩するのだ、という考え方が生きてきている点である。そしてこの様な討論が出来たのは、やはり班活動の一つの成果だということが出来る。

ところでこの様な全体の動きの中で、個々の問題を中心に全体をまとめてみよう。

13. まとめ

この様な全体の動きの中で、個々の問題を中心に全体をまとめてみよう。

A. 規則について

『このクラスに入ってからというもの、私の生活がガタガタになりました。中学校では思いも寄らなかった早弁が大はやり、調子にのって私もやっていましたが、このマンネリしたムードが私にはやり切れませんでした。でもそのうちに早弁がなぜ悪いのか、という疑問が出てきたときにはびっくりしました。今まで私には早弁は悪いことだとオシノケられて、というよりもそう思いこんでいた。私にはアレアレという間になんかクズしていったのを覚えています。それに生徒の力で改正してゆく事が出来ることもオドロキの一つです。何も知らなかった私としては、口をポカンと開けられずにはいられませんでした。』

『規則とは守ることと幼いことから教え込まれ、破ることは決して良くない、という風に生活観念のようになってしまった。自分にとって規則が重荷になって、自由の妨げになった場合どうすればいいのだろう。やはり、自分達で自分の力で治すことだ。』このように、クラスのほとんどが、規則についての考え方を自分なりに考えるようになってきている。

B. 話し合いについて

『このクラスは、みんなで話し合うことがとてもあった。授業のことについて、私たちは時には先生と一緒に正しい方向を探して、何回も話し合った。このことは高校へ入ってからの変化の一つだ。高校へ来るまでは、なぜ話し合うということが少なかったのだろう。よく話し合わなかったから無関心な人が多かったのかもしれない。このクラスでは無関心だといっても、どうしても考えなければならなくなっていた。この一年間に話し合うということの大切さが分かったような気がする。』

話し合いについて、前のような意見を多くの人が書いている。更に次のような意見もあった。

「一番にいいたいことは、話し合いイコール団結ということ。話し合うというものは団結するのに欠かせないものだと思うのです。」

よく初めのうち、ホームルームが長引くとぶつぶつ文句を言う人も現れてきました。実際にクラブに入っていた私がそうでした。クラブに行く時間になっても話し合いが長引いて、こんなくだらない話し合いなんか早く終わればいいのに、と思っていました。その時の私は、クラスのことは2番目でクラブの方が大切だったのです。でもクラスとクラブの両立は大変難しいものです。特に体育系のクラブに入ると、体力的にも精神的にもつかれて、明るく日の授業さえ嫌になってしまいます。

このように、ちょっと私の事を例に挙げましたが、クラスのほかに何か熱中することがあれば、どうしてもクラスのことはお留守になりがちで話し合いがあってもいつもつまらない顔をしてしまうのだと思います。これは私が本当に心から感じたことです。でもそのうち、その熱中しているものに何か欠けているものが自分でも気がついてくると思うのです。

前までは、誰かの提案ひとつで賛成していた自分から提案したそれに対しての意見が持てるような自分になりました。

話し合いによって、今まで接したこともなかった人のことが何らかの型で分かってきました。日頃グループのかたまりがちで一度も話をしたことの無い人でも、話し合いによって分かってくると思うのです。」

C. 目的について

『3学期のある日、7時過ぎまで長い討論が行われてびっくりしました。あのひ、家に帰って私はいろいろ考えました。自分にはなぜしっかりした意見が持てないのだろう。なんだか自分の考えの浅いの腹が立ちました。そうして考えているうちに、私には目的がないというところに突き当たってしまいました。』

このように、目的を見つけなくては、ということを経験者が意識し始めている。しかしまだ、明確に生きる方向を見つけ出し歩んでいるものはごく少ない。

以上全体を振り返って、仲間を作るために必要なものの考え方(例えば規則についてとか、自分だけ良い子になるなど)は段々皆の身についてきたように思える点が多い。又、話し合いの重要性とその良さを皆が少しでも感じたことも大切な点だ。これらは全て、目標を持っていきること、仲間と共に生きることにつながっている。

前にも書いたが、3学期の話し合いの中でこんな感想があった。

『あの話し合いがあった後、私が一番痛感したのは、自分はこの一年7組にとって何なのか、この皆にS子と呼ばれる人間はいてもいなくてもいいんじゃないか、別になんの役にも立たない。でも1年7組はこの42名というたく

柴田昌治コレクション

さんの人数が集まって初めていろんな個性を持ったクラスであって、一人でも欠けたら1年7組ではなくなるのではない、自分がどんなにちっぽけな存在であってもやはり私はいるのだと何度も自分の心に言い聞かせました。でも言い聞かせれば言い聞かせるほど、前言った気持ちが強くなっていくように思えます。』

確かに今のクラスでは、まだ一人が欠けたとしても、それ程決定的ではない。しかし自分が皆にとって本当に役に立つ存在なのか、と問い掛けることができたことは大切な点である。そして彼女は、一年の最後のまとめでクラスの皆に必要とされる存在になるという決意をしている。

最後に非常に大きな問題がひとつ残っている。それは他のクラスと歩調が合っていない点だ。これに関連して次のような問題が出てきている。

『私が2年になって、もしこのクラスの人が多ければ7組のような形式のクラスにしたいけど、先生まで無関心だったら絶対に自信ありません。けれども、今まで先生や友達に教えられたことは絶対忘れません。何でもすぐあきらめずに、やるだけのことはやるように、そして理想に一步でも近付くよう努力したいと思います。』

このようにやる気を多くの生徒が持っているのだが、新しいクラスではたして行動してゆけるか、というところに大きな不安を共通して抱えている。これは明らかに全体が共同歩調を取れなかった弱点の現われである。

まとめとして、昨年の私のクラス1年8組のメンバーで部落研に入っている人が数名いるのだが、その人達の感想を見てみよう。

現在の1年7組には部落研のメンバーが7名いる。その人達を見て感じたこと、クラスの総括を読んで感じたことを皆でまとめてくれたものである。

『今のクラスと前のクラスの違いは、まず第一に話し合いが前のクラスにはなかったことです。前のクラスではホームルームが形式化されていて、例えば仲間とか、団結という問題についての話し合いが持たれたとしたら、どう考えていけばいいのかわからない人が多かったのではないのでしょうか。つまり自分の意見がなく、言おうという意欲さえもなかったのです。そして話し合いが、仲間とか、団結につながるのだということさえも分らなかったのです。前のクラスの一員であった私たちから見ると、今のクラスは班作りを通じて、話し合いが必要だということを感じていたのではないのでしょうか。第2には、前のクラスには皆で仕事をするということができなかったのです。それは第一の問題点から来ることです。今のクラスでは話し合いによって、人の意見を認めたり批判をすることで、自己中心的にならずに皆で協力して仕事ができるのです。』

しかしここで考えなければならないことは、皆が第一・第二のことができていたかということですが、ただその時だけ歩調を合わせていたような人がいたのではないのでしょうか。もしいたなら、その人は反省すべきだし、皆もその人の立場に立って考え、その人を変えていくために話し合いをより一層深めて行かなくてはならないのです。

第三に前のクラスでは各自の目的すら見つけられず、クラスとしての共通の目的までに達し得なかったことがあげられます。今のクラスでは、第一や第二と同じように班作りを通して各自の目的を見出し、それが共通の目的となっているのではないのでしょうか。それでは共通の目的とは一体なんなのでしょうか。

それは、前のクラスでは想像もつかなかった仲間作りということです。そこで仲間作りということについて考えてみると、まず統一者が必要のように感じます。統一者とは、決して独裁的にならず、常に皆ことを考え、意見をまとめ、縁の下の力持ち的な存在になれるような人であるべきなのです。

次に自分の思うこと、感じることを素直に言うことが必要です。又素直になれるような雰囲気が必要なのです。前のクラスにはそれがなく、素直ではないような表現をしていたように感じられます。そしてそのような状態の中では、人間として誰もが求めている、人を信頼する、という事がまるでできなかったのです。誰もが受け身で待っていたようです。それでは仲間作りもできないし、人に対しても不信感を持ち、自分だけの狭い考えにとらわれやすくなります。だから前のクラスでは仲間ということを実感として考えられなかったのです。しかし今のクラスでは大部分の人が仲間の必要性を痛切に感じ、仲間作りをしようとしていることを少なくとも総括を読んで感じました。

私達は今のクラスの人達がこのことを今後活かして連帯の和を広げていって欲しいと思います。同時にこの子とは私達全ての人間にも共通する課題だと思います。』

最後にもう一度まとめておこう。

まず最終目標は仲間を作る中で全ての問題を解決してゆくこと。そして、そのために必要なものの考え方をはっきりさせること。具体的な場面では、お互いに話し合える場(例えば班)を作ること。以上である。